して十分に大きい場合にはこれは或は電子顯微鏡で見得るであろう。唾腺染色体のバンドの微細構造ともつづく可能性もある。そして若干個の基礎ブロックがまとまつて失われた場合にはそれで染色体の部分の喪失として見得るのである。

ここで染色体としてみた場合，その構造単位として構造ブロックは基本のものがあればそれのレプリカは作る事ができるので，自由に染色体としての増大や増数がみられてもよさそうであるが，一般的に驚く程の保守性があつて染色体の不変であることは間違いない。これは細胞質との平衡関係及び他の構造ブロックとの平衡関係が歴史的に生じたもので，その変更は容易でないことを意味する。平衡がみだれずに，或はどうにかこわされずに構造ブロック内植物と動物及びそれ自身に変化がもたらされれば秩序的形質の変化となり，これは進化の一コマである。

一般的な植物では倍数性が普遍的にみられるが，これは暗示的である。多分進化の大部分は倍数化の現象によつて構造ブロック集団(即ちゲノムであり染色体全体である)の思い切つたレプリカ作製を行い即ち二倍の内容を細胞質内に持ち，ついで内外からの影響で（主に外からの衝撃である）この構造ブロックの構成部分を少しづつ失い，その結果構造ブロックも又その全体の集団も内容的に変り，従つて全形質中にもその変化が反映して変つてゆくという方法がとられていると思われる。多細胞植物に一般的な積み重ね体制が染色体集団を単位にしても行われているところに意味がある。この大膽な二倍化が破綻をきたさないのは何といつても植物体が動物体に比してはるかに簡単であることである。簡にしていえば二倍にしては減らすということの反復で植物の大多数の進化は行われているであろう。

動物はそうではない。倍数性の事実の稀な事，複雑な内部構造と神経の存在，胚発生のはめ込み式体制等から見て，恐らく染色体内での反復 (repeat) 即ち構造ブロック内の極少部分だけのレプリカ附加，せいぜい構造ブロックの複製の附加という位の染色体全体としてみるとほんの一部分ずつの附加的な方法で繊細な全体の平衡をこわすことなく変化が加えられ，進化が結果したものであろう。もちろん植物にも動物的な，動物にも植物的な方法のとられた種類，場合，部分はあるであろうが大多数は上述の如へ両者異つていると思われる。　(つづく)

正　誤　(Errata)　(J. J. B. **28** no. 11. Nov. 1953)

頁 (page)—行 (line)	誤 (for)	正 (read)
330—10	aather	rather
330— 8 from below	more less	more or less
330— 7 〃	after "the margin"	add: "margin"
331— 4	1652	1952
333—17	Küner	Kühner